

地域をつくる実践としての保育

—山谷における梶満里子の保育活動とその背景—

Childcare Projects as a Means for Forging Communal Bonds:

A Study of Kaji Mariko's Childcare activities in Sanya

小美濃 彰

This paper examines Kaji Mariko's childcare projects in Tokyo's Sanya day labor district. She was a postwar social activist famous for her efforts to help Sanya's poor and disadvantaged. This article summarizes the various social projects in which she participated and examines the relationship between her childcare activities and the formation of local communal bonds in Sanya.

Before and immediately after the Second World War, she worked as a nurse. However, in 1954, she changed professions and started to work and gained experience in child care at a foster home in Nagoya. After working there for two years, she resigned and began working to develop her own social projects for poor and disadvantaged children. She chose to focus her attention on children living in the slums of Tokyo. Unfamiliar with the city's slums, she sought a guide who could help her establish connections with poor families. Ultimately, she met a social activist, Kaji Daisuke, who had been involved, since the 1950s, in efforts to establish a cooperative organization for the city's ragpickers. With his assistance, Kaji Mariko succeeded in establishing various childcare programs for impoverished children in Tokyo's Sanya district.

Kaji Mariko began working in Sanya in the 1960s. During that period, the Tokyo government began promoting the relocation of poor families residing in Sanya's boardinghouses in order to improve their living conditions. Kaji Mariko believed, however, that efforts to truly improve the condition of poor families required more than providing them with improved housing outside of Sanya. It had to be accompanied by an effort to establish relationships of mutual cooperation between poor families upon which they could depend during times of socio-economic instability. For Kaji Mariko, her childcare was not simply a matter of caring children. As an issue that was intimately related to neighborhood life in local communities, she viewed it as a means for fostering communal bonds between economically disadvantaged households.

【キーワード】 山谷、保育、地域づくり、梶満里子、梶大介

San'ya, childcare, communal bonds, Kaji Mariko, Kaji Daisuke

はじめに

東京の一大観光地、浅草から北に 15～20 分ほど歩いていくと、ドヤ街として知られる山谷にたどり着く¹。ドヤとは「宿」を意味する俗語で、山谷には低価格で素泊まりできる宿泊施設が立ち並び、現在

¹ 現在、「山谷」という地名は通称として用いられている。かつて「山谷町」と呼ばれていたこの地域は、1966 年に住居表示制度が実施されたことで台東区の東浅草・橋場・日本堤・清川、荒川区の南千住という複数の町名に分割されて示されることになった。ただし、東京都城北福祉センター『山谷地域と城北福祉センター』（1972 年）を見ると、住居表示制度の実施後も、明治通りの泪橋交差点を中心に「簡易宿所」が密集する約 0.84 km²（まばらな地域も含めると約 1.7 km²）の地域を総称して「山谷地域」と呼んでいる。ちなみに「簡易宿所」は旅館業法において「宿泊する場所を多数人で共用する構

は海外からも多くの旅行者がここを訪れている。インバウンドのさらなる拡大が期待されるなか、南千住駅を起点に JR や東京メトロなど複数の鉄道路線を利用でき、利便性も高いこの地域への注目は不動産市場にも広がっている²。こうして山谷が注目を集めるに至ったのは2002年 FIFA ワールドカップの日韓開催がひとつの契機だとされている³。そこから次第に多くの旅行者を受け入れるようになっていった山谷のドヤ街だが、宿泊者数のピークは1964年東京オリンピックの前後にあり、その数は把握されていただけでも1万を超えていた⁴。それゆえ、ドヤ街としての山谷の歴史は決してここ数年のものではないのだ。

それと同時に、当時における宿泊者の多くが高度経済成長期の建設ラッシュを支えた日雇労働者であり、山谷は大阪の釜ヶ崎と横浜の寿に並ぶ「日本三大寄せ場」のひとつとして知られてきたことも重要な事実である⁵。つまり、この地域は多くの日雇労働者らを受け入れた生活空間としてのみならず、主として建設業や港湾業など波動性の高い産業に要請される日雇労働市場としても機能してきたのである。ところが、バブル経済が崩壊した1990年代以降の不景気で日雇労働力の需要が縮小したほか、求人方法もスポーツ新聞の広告やインターネットを経由したものへと変わり、さらには労働者が加齢によって就労を拒否されるという状況も生じ、寄せ場で仕事を得ていた日雇労働者の間に慢性的な失業が広がった。その帰結として、日雇で収入を得ることが困難になった労働者はドヤから路上生活へ出て、また現在のドヤ宿泊者の圧倒的多数は生活保護受給者によって占められている。ビジネスや観光での利用が増えつつある現在の状況は、こうした歴史的過程に連なる一幕なのである⁶。

また別の視角から山谷という地域の歴史を眺めてみよう。上述のとおり山谷はドヤ街および寄せ場としての道のりを歩んで現在に至るわけだが、「日雇労働者ら」という表現に含意したように、そこで生活を送っていたのは日雇労働者だけではない。1980年2月に発行された『明治学院論叢』(285・286の合併号)に「山谷児童対策の歴史(1)」という論文が掲載されている。これは明治学院大学の教員と学生、東京都城北福祉センター(現在の公益財団法人城北労働・福祉センター)の職員から構成された「山谷対策史研究会」の研究成果である。このなかで山谷児童対策の研究は、あくまで日本における児童対策史の一環として、あるいは他地域における児童の貧困問題に取り組む手がかりとして位置づけられており、「山谷地域にとっては過去の問題である」と断じられている。しかしここでは、少なくとも過去においては山谷の不就学および未就学児童の存在が大きな問題意識を集めていたことに注目したい⁷。

同会が研究の対象にしている「山谷対策」とは、1960年頃から山谷で暴動が断続的に発生したことを

造及び設備を主とする施設」と定められており、1ヶ月以上の期間を単位に料金をうけて宿泊場所を提供する「下宿」からも区別される。

² 長谷川高「『山谷地区』の意外な現在…労働者の街はどう生まれ変わったのか？」(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/70119> 閲覧日：2020年2月13日)。

³ 鈴木富之「東京山谷地域における宿泊施設の変容：外国人旅行者およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に」『地學雑誌』120巻3号(2011年6月)、pp.466-485。

⁴ 東京都城北福祉センター、前掲(注1)。

⁵ 寄せ場とは、労働市場として機能する特定の地域や路上を指す。寄せ場では、親会社から労働力の調達を委託された業者(手配師や人夫出しと呼ばれる)が求人者として集まり、日雇を主とする仕事の内容(時間や賃金、そして場所)を提示して労働者を募集する。求職者はその中から仕事を探し、業者の案内に従ってそれぞれの労働現場で就労する。

⁶ 山谷労働者福祉会館活動委員会ほか編『はじめての山谷講座』(2017年)。このパンフレットは、2016年12月29日～2017年1月4日の越年越冬闘争のなかで開かれた「はじめての山谷(入門)講座」の内容をもとに構成されている。この講座では、山谷でドヤの改築やマンションの建造などによる景観の変貌が急激に進行していることを認めながら、この地域において現在も継続している課題として日雇労働や野宿生活に関する諸問題を取り上げている。

⁷ 浜野一郎「山谷児童対策の歴史(1)」『明治学院論叢』285・286号(明治学院大学、1980年2月)、pp.77-129。

うけて東京都が実施した福祉政策の総称である⁸。日雇労働者と警察、あるいはドヤの番頭や食堂の店員、はたまたヤクザとの衝突が発端となることが多かった暴動には多くの人々が参加していた。そうした暴動が繰り返される山谷という地域には、東京都だけでなく地域の有力者や様々なボランティアグループ、教育者、研究者など様々な主体が介入を開始したが、そのなかで大きな関心を集めていたのは日雇労働者というより、むしろ子どもたちであった⁹。前述の「山谷対策」もそうした傾向から外れていない。たとえば、同対策のなかで実施された都営住宅の割り当てはドヤに宿泊していた家族世帯を対象とし、子どもとその家族が山谷から次々と転出していく大きな要因となった。

このことに言及した西澤晃彦は、「山谷対策」が家族世帯とそれ以外の単身者を分離し、とりわけ後者が「隔離ないしは無視＝積極的放置」の状態に取り残されたのだと指摘している¹⁰。この論点は、山谷という地域が現在の状況に至るまでの歴史的過程を検討するにあたってきわめて重要なものである。すなわち、「山谷対策」がもたらした上記のような効果によってこそ、山谷が戦後日本の高度成長に不可欠な労働市場すなわち寄せ場へと純化されていったのだと理解することが可能だからである¹¹。これはまた、1980年ごろの「山谷対策史研究会」が、子どもの問題は山谷にとって過去ものだと断じた背景にもなっている。西澤も、日雇労働力として見込まれる単身者の集住地へと山谷を再編しようとする政策が「それほどスムーズにいったわけではない」と断りつつ、「結果的に、この政策は、山谷から家族をなくすことに成功する」と、その効果を追認している¹²。

しかし、この過程が決してスムーズに進行したのではなかった理由について、具体的な検討が試みられたことはない。当の子どもやその家族については、「山谷対策」の実施を経て地域を離れていったという結果的な事実が述べられているだけである。歴史的に実在した葛藤に対するこのような無関心は、実際にそのようなことが意図されていたのかは別として、地域の変容にたいして完全に受動的であった女性や子どもは寄せ場としての山谷において歴史を持たないとも言わんばかりである。本稿が取り組もうとしているのは、山谷をめぐる研究史のこうした穴である。そして、そのための手がかりとして、梶満里子(1928-2001)という人物をこれから取り上げていくことにしたい。

梶満里子は「山谷対策」が実施されていった時期に重なる1963年から、管見のかぎりでは1966年まで、山谷のドヤで生活している子ども(ドヤっ子)の保育を行っていた。その活動の様子を記したものに『粒ちゃんになりたい 山谷の子らと生きる日々』(あすなろ書房、1966年)という本人の著作がある。保育記録をもとに構成された本書には、日付・曜日・天気はもちろん、子どもの様子や梶満里子の対応が反省的に記録されている。子どもの反応を客観的かつ正確に把握することが要請される保育記録の作成にあたって¹³、その場の様子だけでなく家族の生活状況にも注意が払われている。このような資料的価値を備えた著作を読み解き、梶満里子が実践していた山谷での保育活動に目を向けることは、前述したような本稿の課題に取り組む重要な糸口となる。

とはいえ、梶満里子についての紹介は皆無といっても過言ではないし、著作を手にとれる場所や機会

⁸ 1960年夏(7月26日・8月1日、3日～6日)に発生した暴動をうけ、東京都庁企画室で「山谷旅館街宿泊人対策協議会」が設置された。これは同年11月25日に「社会保障対策連絡会議」へと発展吸収されている。ここから東京都社会福祉審議会への諮問や地域の実態調査を経て「山谷対策」が立案および実施されていった。前掲、東京都城北福祉センター。

⁹ 西澤晃彦『隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー』(彩流社、1995年)、pp.48-49。

¹⁰ 同上。

¹¹ ただし、それが具体的にはいかなる状況に要請された過程であったのかを、さらに詳しく分析する必要がある。大阪の釜ヶ崎においても共通の事態が生じたが、それは暴動の発生だけでなく、1960年代における大阪港の港湾稼働量の急増、そして大阪万博に向けた開催地建設や都市整備のための労働力需要を背景としていた。原口剛「地名なき寄せ場 都市再編とホームレス」西澤晃彦編『労働再審 4 周縁労働力の移動と編成』(大月書店、2011年)、pp.157-200。

¹² 前掲、西澤(1995年)、pp.66-67。

¹³ 石村紀子「保育日誌の利用」日本幼稚園協会『幼児の教育』第59巻11号(1969年)、pp.22-26。

もそう多くはない。そこで本稿では、梶満里子が保育にたずさわるようになった経緯から、山谷に至るまでの保育活動の全体像を俯瞰したい。山谷での保育活動に関心を向けつつその背景を捉えることは、山谷での活動がそれ以前に積み重ねられた実践から不可分の関係にあったことを示すためにも必要である。こうした作業をふまえ、山谷の歴史における子どもの存在にあえて目を向け、そこで活動した梶満里子の実践を見つめていくことで何が浮かび上がってくるのかを検討したい。

なお、各節の記述にあたっては先述した『粒ちゃんになりたい』のほかに『愛の砂に花ひらく』（第二書房、1964年）という、梶満里子が1961年から1963年にかけて取り組んだ伊豆諸島・新島での保育所づくりの記録も参照している。また、本稿では梶満里子が保育活動を行うにあたって不可欠な協力者であった梶大介(1923-1993)についても言及している。梶大介は終戦直後の日本社会をバタヤとして生きるなか、屑拾いという職分および担い手たるバタヤへの蔑視やその貧困状態を問題化し、1950年代の中ごろからバタヤの協同組合設立を目標とする活動に取り組んでいた。その生活と活動を記録した著作が梶大介にもあり、本稿では『バタヤ物語 俺達だって人間だ』（第二書房、1956年）と『粒ちゃんの灯 妻と子と大八車の記』（光文社、1957年）を主に参照した。

1. 保育活動にいたるまでの梶満里子の半生

まず本節では、梶満里子が保育にたずさわるようになった経緯と、その後の保育活動のなかで重要な協力者になる梶大介との出会いに触れておきたい。これは、梶大介との結婚を「相対的夫婦の愛情をこえて、スラムの解放目的を頂点とした同志的な結合」¹⁴と表現した梶満里子の歩みを追っていくためにも重要なことである。

4

看護婦から保母へ

1928年に愛知県名古屋市で生まれた梶満里子は、戦争末期の1945年に名古屋帝国大学医学部付属医院看護婦養成所(当時)に入所し、名古屋市街が空襲をうけたときには負傷者の救護に参加していた。その戦争体験をつづった手記では、物資不足で十分な手当ができなかった状況、死体をひきずって動かしたり、そのうえを跨いでいったりしたことを、「人間が人間を人として取り扱わなかった恐ろしさ」として振り返っている¹⁵。とはいえ、「愛国という美しい言葉、尊い精神」に魅せられて看護婦を選んだ梶満里子にとって、その仕事は「白衣の天使という、当時の乙女心を十分に与えられるだけの花形」であった¹⁶。そこから保育へと向かっていく転機が訪れるのは終戦後のことだったようだ。梶満里子はその経緯について、かなり後になる1964年の文章ではあるが、つぎのように述べている。

忠君愛国の教育で成長し、従軍看護婦を志願して日本のために死をも平然と甘受していたその当時の一途の気持も終戦と共に覆され、生きる支柱を失い、食べることにのみあくせくして数年の月日が流れ、人間とし女としてどう生きるべきかと心を外に向けたときは、すでに二十五才を過ぎていました。看護婦の仕事を惰性で続けることに堪えきれず、友人の紹介で養護施設の保母に転身し、保母の講義を受け、資格をとり、新しい保育の仕事に情熱をわきたたせました。¹⁷

¹⁴ 梶満里子『粒ちゃんになりたい 山谷の子らと生きる日々』（あすなろ書房、1966年）、p.4。

¹⁵ 梶満里子「白衣の天使」草の実会第七グループ(編)『戦争と私 主婦たちの第二次世界大戦記』（草の実会第七グループ、1963年）、p.104。

¹⁶ 前掲、梶満里子(1964年)、p.3。

¹⁷ 梶満里子「新島と山谷の生活から」「月刊社会教育編集委員会」編『月刊社会教育』78号(1964年5月)、p.40。

「忠君愛国」の精神をもって務めていた看護婦から離れるきっかけとなったのは終戦、すなわち日本の敗戦であった。友人の紹介をうけて保母という職業を選択したとのことだが、このように異なる職業経験を積んでから保母へ転職することは戦後において珍しくなかった。1947年に児童福祉法が制定されると、保育所などの児童福祉施設にならんで保母養成の制度的な整備も進み、働きながら講座を受けて資格を取得するというコースが開かれたのである¹⁸。ともあれ養護施設で保母としての仕事に就いた梶満里子だが、数年後には退職しており、そのきっかけが先の引用に続けて述べられている。梶満里子は、自分の担当した子どもが養護施設の外でうけている社会的な処遇のありかたに問題意識を抱いていた。

担当している子供たちには児童福祉法も棚の上のぼた餅であることも知りました。保育園へ行っても施設の子供だけで別クラスを編成し、年齢別に他のクラスとの混合保育を希う私に「そうすると一般のお子さんが少なくなります」と園長。「ガラスを壊した」「靴が失くなった」みんな施設の子の罪にされてしまう。未熟な一保母の言葉や力などみみずのたわごととしか経営者は受けとらない。¹⁹

ここで梶満里子が批判しているのは、養護施設にいて子どもが背負わされている状況である。児童福祉法は第2条で「全て国民は、児童が良好な環境において生まれ、かつ、社会のあらゆる分野において、児童の年齢及び発達 の程度に応じて、その意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮され、心身ともに健やかに育成されるよう努めなければならない」という義務を定めている。しかし、梶満里子が担当していた子どもは養護施設に入所しており、そのことによって保育園のクラス編成や園内でのトラブルをめぐる不利益を被っている。梶満里子は養護施設から通う子どもの分離を改めるようクラス編成の変更を求めているが、引用によれば「一般のお子さんが少なくなる」という理由で退けられている。子どもの養育をめぐる家庭の負担を軽減して労働力再生産に便益をもたらす意図が児童福祉法にあったことをふまえれば²⁰、子どもの数が減るということは保育園の経営だけでなく社会全体の労働力再生産に負担をもたらす事態としても解釈できる。引用のなかで梶満里子が触れている問題をこうした文脈のなかに位置づけてみれば、児童福祉法が「棚の上のぼた餅」にすぎないということの意味も理解できよう。梶満里子が担当していた子どもはその原因のような存在と見なされており、それゆえ何らかの偶然、つまり「ぼた餅」が転がり落ちてくるような変動が起きないかぎり、問題は解決されないのである。

しかし、梶満里子が養護施設から離れたことは保育それ自体の断念を意味せず、むしろ異なるアプローチで保育に深くたずさわっていく。1956年6月、梶満里子は看護婦と保母の免状、そして「スラム街の中に部屋を借りて保育室を開く」という計画を携えて東京に向かっている²¹。

梶大介との出会い

それまで住み続けていた名古屋を離れた梶満里子は、保育室の資金をつくるために臨時派遣の看護婦

¹⁸ 松本なるみ「戦後における「保育者」という職業選択 元保育者の語りから」『宇都宮短期大学人間福祉大学研究紀要』7号(2009年)、pp.9-20。

¹⁹ 前掲、梶満里子(1964年5月)、pp.40-41。

²⁰ 松崎芳伸「児童政策の進路」厚生省児童局監修『児童福祉』(東洋書館、1948年)、pp.5-50。

²¹ 梶満里子『愛の砂に花ひらく』(第二書房、1964年)、p.12。

として働いていた。しかし、保育室をつくろうと目指していたスラムと個人的に関係を結ぶことは、上野や秋葉原、日暮里や山谷といった場所を「逃げるように通り過ぎる」²²ことが精一杯だったという梶満里子にとって容易ではなかった。そこに転機をもたらしたのが梶大介との出会いである。終戦を経て中国から日本へと引き揚げた梶大介は、バタヤとして生活を送りながら東京など各都市を転々と移動し、1950年代の中ごろからはバタヤの協同組合設立に向けて動き出していた²³。

梶満里子が名古屋から東京に移住したちょうどその時期、東京都中野区の仕切屋にいた梶大介が「週刊朝日」(1956年6月10日)の投稿欄「読者と編集者」に「私はバタ屋です」と題した文章を寄せている。1956年5月に労働省職業安定局失業対策部編『日雇いの歌』(労働法令協会)が出版されると、同誌の書評欄「週刊図書館」がこれを取り上げ、本書に収められた秀作を生むほどの人物がなぜ不安定な日雇労働に従事しているのかという疑問を投げかけている²⁴。これに対し、日雇労働への従事を否定的にしか見ていない評者へ批判的に応答し、日雇労働者の様々な経歴や人柄を書き連ねた読者の投稿が寄せられた²⁵。そこに重ねて「おそらく、これより下のない、どん底の人生であるが、ニコヨン諸氏に負けず劣らず多士済々である」²⁶とバタヤの世界を紹介しようとしているのが梶大介の投稿である。

おそらく梶満里子も誌上でこの論議を目にしていたのであろう。投稿の末尾には梶大介が当時生活していた仕切場の住所も記載されていた。雑誌で梶大介の名前を見かけたという梶満里子は、本人に手紙を書き送ってスラムの案内を依頼したのである²⁷。だが、後年に梶満里子が著作『愛の砂に花ひらく』のなかで回想しているところによれば、依頼にたいする梶大介の反応は以下の通りで、梶満里子の期待にすぐさま応じたものではなかった。

6

私は、神にすぎるような気持で、手紙をしたためた。

(どうしてもスラムで生きたい!)

このこめた願いの手紙を、どう受け取ったのか、返事はこだまより早く届いた。

私の切実な願いなど、あっさり娘特有の感傷としてバッサリ切り捨てていた。

私は重ねて手紙を書いた。

(どうしてもスラムで働かしてほしい)

今度の返事は前よりも、もっと無残にきり捨ててあった。

しゃくにさわって、私はもう一度手紙を書いて送った。

(何が何でもスラムに生きたい!)

ところが、驚いたことに、

(じゃあ結婚しよう)

²² 同上、p.14。

²³ 梶大介がバタヤの協同組合設立に乗り出したのは京都・東七条での「あいあいクラブ」が初めてで、これは地元日刊紙に報じられている(「バタ屋も仲間入り 京で日本初の組合結成」『都新聞』1954年11月4日)。しかし、この場所でバタヤを組織しようとした「あいあいクラブ」の試みには、梶大介と数名の友人が参加したのみで、バタヤの自立更生に向けた共同仕切場の設立などいくつかの目標を提示するにとどまった(梶大介『バタヤ物語』第二書房、1957年)。屑拾いに従事するバタヤの多くは仕切屋と呼ばれる買い取り業者から、道具のほかに長屋の一角を住居として貸し与えられることが多く、拾い集めた屑をその仕切屋へと持ち込むことが原則とされていた。梶大介は、仕切屋によるバタヤの搾取を可能にしていたこのような関係に対し、バタヤの自立を掲げていたのであった。バタヤについての基礎的な社会史的研究として野中乾・星野朗『バタヤ社会の研究』(蒼海出版、1973年)を参照されたい。

²⁴ 「ニコヨン文芸 労働省編『日雇いの歌』」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956年5月20日)、p.67。

²⁵ 熊本浩二「『ニコヨン文芸』評に答う」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956年5月27日)、p.136。

²⁶ 梶大介「私はバタ屋です」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956年6月10日)、p.85。

²⁷ 前掲、梶満里子(1964年)、p.14。

である。²⁸

単身で名古屋から東京にきた梶満里子にとって、梶大介が頼ることのできる唯一の存在であったのか、拒否を受けても3度にわたって依頼を繰り返している。そこで梶大介から送られてきた3度目の返信に記されていたのが、結婚という突然の提案であった。これに対して梶大介本人のもとを訪ねることにした梶満里子は、対面の場で以下のような言葉を受けたという。

あんたは、スラムの子どもたちに何とかしてあげたい、という。そんなあんたに、スラムの子どもたちはどんな反応を示すと思うかね。彼らは敏感なんだ。きっと、あんたは逃げ出さざるをえなくなるだろう。そして、あんな子どもたちはしょうがないというに違いない。これはお互いに不幸だから、中途半端な気持ちならやめておいたほうがいい。もし、どうしてもやりたいなら、一切を捨てて仲間入りすることだ。おれが結婚しようといったのは、そのためだ。甘い感傷じゃ、とてもバタヤの女房になれっこないからね。²⁹

梶満里子に対して梶大介が示していたのは、「何とかしてあげたい」という慈善的な態度への不信と拒絶である。そこには、保育室を開くという計画が挫折するだろうという推断すらこめられている。しかし、「神にすぎるような気持ちで、手紙をしたためた」という当時の梶満里子にとって「一切を捨てて仲間入りする」結婚という条件は、そのとき梶大介との間に残された唯一の可能性だった。梶満里子は梶大介との結婚を選び、「相対的夫婦の愛情をこえて、スラムの解放目的を頂点とした同志的な結合」とこれを表現したのであった。ただし、いうまでもなく梶満里子の目標は「バタヤの女房」になることでなく、梶大介と関係を結んだその先にある。スラム街に保育室を開くという計画に向かって歩みだした梶満里子の足取りを、続けて追ってみたい。

7

2. 保育と屑拾いの接合

「自然保育」という実践

1956年8月1日、東京都の練馬区内にあった仕切場に住んでいた梶大介のもとに梶満里子も移り住み、その翌日には保育に必要な中古のオルガンや折り紙などが買い揃えられている。とはいえ、このときに保育室が確保されていたわけではなく、まずは空き地や児童公園を利用した「自然保育」が実践された。これは、公園や寺社の境内など広い場所にオルガンや絵本などを大八車で運びこんで梶満里子が周辺の子どもたちを保育し、梶大介はその間に屑を拾ってまわるという方法である³⁰。屋外での保育活動は「青空保育」と呼ばれており、戦災によって幼稚園や保育園といった施設を多く失った東京では戦後しばらく、しばしば寺社の境内や河原などが保育に活用されていた³¹。梶大介が提案した「自然保育」の特徴は、「金はなくとも、どんなに貧しくとも、たとえ社会の蔑視の下に生きるバタヤでも、やる気さえあるなら少しでもこの世に何らかプラスして行けるという事を、実証したかった」³²という言葉にも表されているように、あえて屑拾いと保育活動とを結びつけて実践したことにあった。「自然保育」の様

²⁸ 同上、pp.14-15。

²⁹ 同上。

³⁰ 梶大介『バタヤ物語 俺達だって人間だ』（第二書房、1957年）、p.164。

³¹ 塩沢美代子・島田とみ子『ひとり暮らしの戦後史 戦中世代の婦人たち』（岩波書店、1975年）、p.126。

³² 「青空保育拝見 保母さんが毎週巡回」『朝日新聞』（1966年7月17日、東京、朝刊）。

子は『毎日新聞』紙上でも紹介されており³³、梶大介はこの実践を「子供を中心にした、バタヤと一般社会との交流」³⁴と捉えていた。

この「自然保育」のモチーフは、屑拾いのなかで集めた紙や鉛筆をつかって紙芝居をつくり、それを出会った子どもたちに披露してきた梶大介の実践であり³⁵、梶満里子も「教えたり導いてやろうなんて思ったら間違いだよ。むしろ、子どもたちに遊んでもらうと思わなきゃ。そしたら、子どもはどんどんついてくる」という梶大介の言葉を受けとめ、「保母としてのテクニックが、テクニックだけで終わったら何にもならない。やはり、心である。子どもの純真な心をどう受け止めるかが、かんじんなのだ」と自分自身に言い聞かせていた³⁶。とはいえ、バタヤとして生活しながら子どもとの関わりを持ってきた梶大介の習慣のなかに、ただ梶満里子の実践を埋め込むことは不適切であろう。ここでは、単に梶大介の実践を梶満里子が引き継いだと理解するのではなく、保母としての実務経験を持つ梶満里子が保育を実践したことによって生みだされた活動の広がりへの洞察が必要である。この点に留意しながら、「自然保育」以降の展開をさらにたどってみたい。

東都資源回収労働者組合と一粒会

1956年の夏ごろにはじまった「自然保育」は、冬が近づくにつれて屋内の保育場所を確保する必要に迫られていた。そこで出された梶大介からの提案が、バタヤがそれぞれ生活している仕切場を離れて集まり、共同仕切場を運営しながら収益を保育室の設立にあてるという方法であった。バタヤが既存の仕切場から自立して組合を結成するという試みは梶大介にとって初めてのことでなく³⁷、ここでは保育室を開くという梶満里子の目標を共有しながらバタヤの組合設立が企図されていた。計画では共同仕切場のほかに住宅の建設や健康保険の獲得などが目指され、バタヤが集住していた都内の各地区(豊島区要町、足立区西新井、浅草・東本願寺、国鉄秋葉原駅ガード下)をまわって参加の呼びかけをおこない、1956年11月には「東都資源回収労働者組合」の結成式が持たれている³⁸。しかし、実現に向けた具体的な計画を備えていなかったこの試みは用地の確保に失敗し、梶大介によれば既存の仕切屋からの妨害を受けて挫折にいたっている³⁹。

だが一方で、梶大介は翌年、東都資源回収労働者組合結成までの生活を記した『バタヤ物語 俺達だって人間だ』(第二書房、1957年)を出版しており、同書は『朝日新聞』の読書欄で短いながらも書評をうけるなど広範な反響を生み出した⁴⁰。同じ時期の『毎日新聞』では、梶大介と梶満里子によるラジオ

³³ 「近所のバタヤ部落の子供たちに自作の紙芝居を見せたり童話を聞かせ、また大八車に紙芝居や児童向の本などを積んで仕事にでかけ、行く先々で暇をみては付近の子供たちに紙芝居を見せるなど子供たちから『オジちゃん』『オバちゃん』としたわれているバタヤさん夫婦がいる」(「新妻も大八車で紙芝居」『毎日新聞』(1956年8月14日、東京、朝刊))。

³⁴ 前掲、梶大介(1957年)、p.83。

³⁵ 同上、pp.74-86。

³⁶ 前掲、梶満里子(1964年)、p.22。

³⁷ 注23参照。

³⁸ 組合結成の様子は大手新聞各社によっても報じられている。「目ざす『バタヤ組合』梶さん夫婦が“どん底救済運動”」『毎日新聞』(1956年10月22日、東京、朝刊)。「バタヤさん労組結成」『朝日新聞』(1956年11月11日、東京、朝刊)。「バタヤさんの労組」『読売新聞』(1956年11月11日、東京、朝刊)。

³⁹ 前掲、梶大介(1957年)、pp.168-211。同『粒ちゃんの灯 妻と子と大八車の記』(光文社、1959年)、pp.85-112にも記述がある。ちなみに、梶大介が目指したバタヤの組織化が期待されたように進まなかった要因は、組合の結成にあたって掲げられた計画だけに求められるべきではない。注23で触れた京都・東七条や隣接している東九条、そして「東都資源回収労働者組合」への参加が呼びかけられたいくつかの地区について、バタヤの集住地となった歴史的な過程を検討する必要がある。戦後からバタヤとなり、様々な場所を流動していた梶大介の呼びかけが思うように反応を得られなかった理由は、それぞれの地域社会におけるバタヤのありようを捉えなければ明らかにできない。

⁴⁰ 「われわれも人間だ...」『朝日新聞』(1957年5月23日、東京、朝刊)。

番組の出演まで決定されていたことがわかる⁴¹。共同仕切場と保育室を目標にした組合の設立は挫折したものの、『バタヤ物語』の出版はそうした行き詰まりを突き抜けるためのきわめて重要な成果となった。

同書の出版からおよそ半年後の1957年10月、梶大介と梶満里子は東京都調布市の多摩川沿いに位置する土地を借り、さらにカマボコ兵舎40坪分と建築資材としてのハードボード500坪分という支援を受け、共同仕切場と保育室を開くという目標を実現したのである⁴²。そして、この場所で梶大介と梶満里子を中心に結成されたバタヤの組合は「一粒会」と名づけられた⁴³。立地の悪さに屑物価格の下落が覆いかぶさり、ここでも期待通りにバタヤの参加を得たわけではなかったのだが⁴⁴、『毎日新聞』が報じているところによれば、梶満里子が「一粒学校」として開いた保育所には日々50人もの子どもたちが集まっていたようである⁴⁵。

それにしても、東都資源回収労働者の挫折から『バタヤ物語』の出版を経て一粒会の結成に至る、目まぐるしいほどの展開はどのような経緯に裏づけられていたのだろうか。梶大介が『バタヤ物語』に続けて2年後に上梓した『粒ちゃんの灯 妻と子と大八車の記』(光文社、1959年)のなかに、以下のような手がかりが残されている⁴⁶。

私たちが、現在地、正確に言えば、東京都下調布市下布田二七八七番地の三千坪の土地を踏んまえるに至ったのは、けっして、金銭ではなかった。

たった一つ、どん底に生きる願いを持っていたからだ。それにしても、人間の縁というものは微妙である。

ニッポン放送の“歌声は消えず”という番組の録音で知り合った藤巻さんが、都庁詰めの内外タイムス記者の水田さんを紹介してくれ、その水田さんの仲立ちで、元朝日新聞にいた由井さんと知り合い、由井さんの協力で、調布の古い社会事業家、塩沢正一郎氏から、昔、林間学校をやっていた所を借り受けることになったのである。⁴⁷

梶大介の説明にしたがえば、調布の土地を梶大介と梶満里子に貸し与えたのは、ニッポン放送の番組収録関係者から複数の仲介を経て紹介された塩沢正一郎という社会事業家であった。このような関係を結

⁴¹ 『バタヤ物語』—おいらだって人間だ—という題の本が、最近第二書房から出版された。これは下谷のバタヤ部落に住む梶大介さんという人の書いたもの。／ところがこの梶さん夫妻を中心にした放送が、十四日(ラジオ東京)後3・25「あなたの回りの物語」と十五日(ニッポン放送)後11・0「日本の表情」と期せずして二つの放送局から放送される。ラジオ東京の方は二回にわたるセミ・ドキュメンタリー・ドラマという構成、ニッポン放送の方は録音構成、両方にこの夫妻の声が扱われる」(「夢は貧しい子らに『バタヤ物語』2局から放送」『毎日新聞』(1957年5月13日、東京、朝刊))。

⁴² 梶大介の説明によれば、カマボコ兵舎は「東京中日新聞社の企画部長水上氏の斡旋で、青山のミカ洋裁店主藤原美智子さんと、その支配人伊東忠二郎氏の好意であり」、ハードボードは「与志本林業常務由井氏の善意によるものだった」(前掲、梶大介(1959年)、p.120)。これらの支援者については詳細をたどることができないが、梶大介と梶満里子にたいする幅広い支援網が形成されていたことが推測される。

⁴³ 永井萌二「どん底三千キロ バタヤ旅日記」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1958年12月28日)、pp.84-87。

⁴⁴ 1950年代半ばから日本経済は高度成長期に突入するが、神武景気に続いた鍋底景気において資源回収業は大きな経済的打撃を被った。好況期に増加した鉄屑・非鉄金属など原材料の輸入は不況期の在庫過多へとつながり、国内における屑の買い取り価格を下落させた。製紙産業においても成長期の設備投資が不況を経て紙屑価格の下落へと転じ、「各家庭のゴミ箱は紙屑であふれる始末」であった。東京都資源回収事業協同組合『東資協二十年史』(1970年)、pp.130-156。

⁴⁵ 『一粒の麦』どこへ『毎日新聞』(1959年5月12日、東京、朝刊)。

⁴⁶ 『粒ちゃんの灯』は1954年に光文社が創刊した新書シリーズ「カッパ・ブックス」の一冊として出版された。新書として岩波新書に続く「カッパ・ブックス」の出版業界における位置づけについては、新海均『カッパ・ブックスの時代』(河出書房新社、2013年)を参照。また、カッパ・ブックスは1950年代の大衆消費文化を象徴するもののひとつとして言及されることもある(鳥羽耕史『1950年代「記録」の時代』河出書房新社、2010年)。

⁴⁷ 前掲、梶大介(1959年)、p.117。

ぶことができたのは「たった一つ、どん底に生きる願いを持っていたからだ」と梶大介は述べているが、ここでは可能な限り具体的な考察を試みてみよう。まず、『バタヤ物語』の執筆が大きな役割を果たしたことは間違いない。梶大介は前述した「週刊朝日」への投稿「私はバタ屋です」のなかで「近年ニコヨン芸術が評価されはじめたが、本当に生の悲しさを知った、どん底生活者たちがうたい上げるもののなかにこそ、真実があると思う」⁴⁸と述べており、『バタヤ物語』の「あとがき」では「その頃、須田寅夫さんの『ニコヨン物語』が現れて、大変な人気を集めていた。私は大いに刺激されて、思い切って、第二書房に手紙を出した」⁴⁹とも書いている。それゆえ、梶大介の執筆活動が当時の生活記録の流行を見込んだ戦略的なものであったと捉えることもできる⁵⁰。

しかし、共同仕切場や保育室を開く土地と資材の支援を集めることができた理由については、もう少し詳しく考えることができそうである。ここで、梶大介と梶満里子に土地を貸し与えたとされている塩沢正一郎がどのような人物であったのかを少し詳しく見てみよう。

梶大介は塩沢正一郎について、「すでに六十七歳、第一線からは引退して、晴耕雨読の生活をされている人格者であるが、かつて、日本社会事業連盟の事務局長として活躍」⁵¹した人物だと説明している。塩沢の名前は『社会福祉人名資料事典』にも見ることができ、1917年に東京府下谷区で設立された「知徳会託児所」で主任を務めていたと記録されている⁵²。ほかの資料からは「東京私設社会事業連盟」(1929年結成)や「全日本私設社会事業連盟」(1931年結成)にも参加していたことも確認できる⁵³。さらに、下谷区で保育事業を運営していた知徳会と調布との関係を示す直接の証拠ではないが、その手がかりとして東京市の公立・私立の保育事業の協力団体として組織された「東京児童指導者会」による「夏季転住事業」を挙げることができる。1929年夏に開始されたこの事業は、東京市内それぞれの保育事業が児童に一週間ずつのキャンプ生活を経験させるというもので、その実施場所は調布近辺の多摩川畔であった⁵⁴。限られた資料からはかろうじて、「昔、林間学校をやっていた」という調布の土地と塩沢正一郎との関係が「夏季転住事業」を媒介にしていたという可能性を取り出すことができる。

では、子どもを対象に社会事業をおこなっていた塩沢正一郎が梶大介と梶満里子に土地を貸与するという、その判断の根拠はどこにあったのだろうか。前述のとおり、他にもカマボコ兵舎など資材が提供されており、そこに梶大介の著作活動や梶満里子を含めたラジオ出演などが影響していたことを推測するのは容易だろう。しかしながら、『バタヤ物語』の内容からしても、決して成功を積み重ねてきたと言えない活動が広範な支援を引き出したのはなぜか。おそらく、これを実践面において根拠づけていたのが梶満里子だったのではないだろうか。東都資源回収労働者組合から一粒会に至る方向づけをおこなっていたのはたしかに梶大介であったが、支援の根拠はバタヤの組合が設立される可能性よりも、むしろ梶満里子が着実に保育の実践を積み重ねてきたことあるのではないだろうか。梶大介が述べているよう

⁴⁸ 前掲、梶大介(1956年)、p.85。

⁴⁹ 前掲、梶大介(1957年)、p.213。

⁵⁰ 第二書房から1956年に出版された須田寅夫の『ニコヨン物語 笑と涙で綴った日雇の手記』は、飯田橋職業安定所の失業対策事業に登録していた著者の生活記録である。同年には、日活がこれを原作とした映画を制作しており(監督・井上梅次)、須田はさらに姉妹編の『天下の為さん』も続けて上梓している。梶大介はこうした人気に着目して、出版社の第二書房に自信の生活記録の出版を依頼したのである。

⁵¹ 同上。

⁵² 知徳会の事業内容は以下の通り。「大正六年三月設立、初め単に知徳会と称し大正五年四月以来義務教育を受けられない学令児童及び小学生の為に、毎日曜日にお話会及び夜学会を開催したが、六年正月から保育事業を開始した。大正七年末、九十七名、保育料一日三銭、毎月二回医師を招いて児童の健康状態を検し、又毎月一回母の会を開いた。同年度収支各八三六円」(日本図書センター『社会福祉人名資料事典』2003年、p.8)。

⁵³ 『『全日本私設社会事業連盟』大阪で創立準備委員会』『大阪毎日新聞』(1931年4月17日)。塩沢正一郎・鶴見欣次郎「東京私設聯盟より」平野義一編『私設社会事業 丸山鶴吉先生古稀記念集』(東亜援護協会、1953年)、pp.248-250。

⁵⁴ 調布市史編集委員会編『調布市史 下巻』(1997年)、pp.595-597。

に金銭を通じて得られたものではないにせよ、「どん底に生きる願い」が報われたということだけではあまりに茫漠としている。ここではむしろ、これまでにたどった経緯を踏まえ、梶満里子が梶大介との協力関係を結んで育活動を実践してきたことを一粒会の結成、すなわち共同仕切場と保育室が実現された現実的な根拠として位置づけるのが説得的であろう。

こうして一粒会の活動は、屑拾いと保育という2つの軸が接合されることによって支えられることになった。さらに、梶満里子の保育活動は一粒会での「一粒学校」にとどまらず、一粒会として同時代の労働運動に加わろうとした梶大介の志向にも影響されながら、さらなる展開を遂げていくことになる。その展開の具体的な内容を次節で示すことにするが、ここでも先取りして端的に触れておこう。一粒会はその後、調布の共同仕切場を経済的な土台にしながら保育の場を伊豆諸島・新島へと広げる。当時の新島は防衛庁によるミサイル試射場建設をめぐる住民闘争が繰り広げられていたのだが、なぜここで保育活動がおこなわれたのだろうか。次節では、この新島での活動に焦点を絞ることにしたい。

3. 新島基地反対闘争における保育所づくり

一粒会と新島基地反対闘争

一粒会は伊豆諸島・新島で1961年～1963年にかけて梶満里子を中心とした保育所づくりに取り組んでいる。当時の新島は防衛庁のミサイル試射場の受け入れをめぐる激しい住民闘争の最中であつた。まずは、そうした状況下にあつた新島と一粒会が関係を結ぶことになった経緯をたどってみたい。このことについて詳しく記された資料があるわけではないのだが、ひとつの手がかりとして秋山健二郎・森秀人・山下竹史編『現代日本の底辺 第1巻 最下層の人びと』（三一書房、1960年）による一粒会への言及を参照してみる⁵⁵。

同会は、現在のところ人員も少ないが、東京本部ではすでに関係会社との契約で、オート三輪による回収を実施しており、組織強化の点でも全国各地のバタヤに呼びかけて、労組との提携を促している。“平和と民主主義を守る東京共闘会議”にも小さいながら常任団体として“一粒”名をつらねているのも、労働者階級共通の問題として、バタヤの組織化を推進しなければならないとする現れにほかならない。⁵⁶

一粒会における「東京本部」や「全国各地のバタヤ」などをめぐる組織的な構成や状態については不明である。ただし、ここで重要なのは、一粒会が労働者階級としてバタヤを組織化しようとしていた点である。この著者によれば「平和と民主主義を守る東京共闘会議」への参加がそのような志向性を現わしているのだという。この「東京共闘会議」は、1958年の警職法改悪反対闘争において東京地方労働組合評議会(東京地評)を中心に形成された共闘会議を母体とし、様々な市民団体の参加を得て1959年に改組されたものである。これに呼応して都内21区と三多摩地区に「地区共闘会議」がつくられ、さらにその小単位として形成された「地域共闘会議」は無数にのぼったとされている⁵⁷。梶大介の晩年における回想をめぐってみると、一粒会に参加していた者のなかには「折柄のエネルギー革命で炭坑を離職してき

⁵⁵ 『現代日本の底辺』は4巻にわたるルポルタージュで、編者を中心とするグループが全国各地の貧困の実態を現地での生活と取材に基づいて記録したものである。この調査活動を契機に結成されたのが「底辺の会」であり、機関誌として「月刊ていへん」を発行したほか、底辺の会編『ドヤ 山谷を中心に』（三一書房、1961年）を出版している。

⁵⁶ 秋山健二郎・森秀人・山下竹史編『現代日本の底辺』第一巻「最下層の人びと」（三一書房、1960年）、p.201。

⁵⁷ 竹内基浩『「六〇年安保」を労働者はいかに闘ったか』（社会評論社、2010年）、pp.66-69。

たものもボツボツ見えはじめ、それなりに労働運動を経験しており、私たちの組合も遅ればせながら東京地区の『平和と民主主義を守る共闘会議』に参加して行った」⁵⁸とあり、一粒会が「東京共闘会議」に参加していたことは事実であろう。

その一方、新島では1957年7月、防衛庁によるミサイル試射場建設の内定が発端となり、受け入れの賛否をめぐる地域闘争が新島の住民間にとどまらず繰り広げられていた。新島での闘争は当時の平和運動において岸信介内閣成立以降の軍事化の潮流に対抗するものとして注目を集めていたのである。1957年12月には東京地評が反対派として調査団を派遣し、翌年2月には現地で「新島ミサイル試射場設置反対同盟」が結成されている⁵⁹。また、1961年には「東京共闘会議」が4次にわたって反対派オルグ団を新島へ派遣しており、梶大介と梶満里子もこのオルグ団に同行して新島へと渡っていた⁶⁰。新島との関係はこのように、一粒会がまず労働運動との接点を求めながら反戦運動に加わっていくなかで取り結ばれたのである。では、そのなかでなぜ一粒会は保育所づくりに取り組むことを選択したのだろうか。そして、それはミサイル試射場建設をめぐる地域闘争の最中にあった新島においてどのように進められていったのだろうか。

闘争の中の保育所づくり

はじめに一粒会として新島に向かったのは、1961年1月21日に「東京共闘会議」のオルグ団に参加した梶大介であった⁶¹。1957年にミサイル試射場設置の動きが発覚して以来の対立を続けてきた当時の新島では、その後、1961年3月13日に村議会が建設予定地に通じる道路建設の予算を議決し、3月23日には工事が着工されている。2月20日には防衛庁、自民党、社会党の三者が「政治休戦」を協議し、賛成派と反対派にそれぞれ加勢していた右翼とオルグ団の引き揚げも決定されていた⁶²。しかし梶大介は、現地の反対同盟や残留したオルグ団の一部や学生が継続していた闘争への参加を選択している。新島に渡ってから数か月後に書かれた手記のなかで、梶大介はその理由を以下のように書いている。

新島で一番欲しいのは闘うための金であることは間違いないが、それと共に、子どもの施設だった。／即ち、保育所の必要性がすごく高いのである。一家ことごとくが働かねば食べていけない状態だから、子供は、いけないことだが、足手まといになり勝ちである。まして、重要な段階における動員態勢に欠くべからざる新島の反対戦力が、オンバア会(反対派婦人会)等女性が主力であってみれば、その必要は絶対性を帯びてくる。⁶³

闘争資金にならんで「子どもの施設」が必要だという梶大介の考えは、たしかに新島における闘争の実情に即したものであった。というのも、当時の新島では村営の採石場や東京都の失業対策事業のなかで反対派の労働者への圧迫が強まっており、収入を得るためにミサイル試射場建設予定地への道路工事に出ている村民もいた。そのなかで、収入を得ようとする男性に代わって女性が政治的発言をおこなう傾

⁵⁸ 梶大介『生ききらなければ真実は見えてこない わがどん底歎異抄』(樹心社、1986年)、p.145。

⁵⁹ 前掲、竹内(2010年)、pp.50-51。

⁶⁰ なお、新島にはミサイル試射場の受け入れを支援する団体も多く向かっていた。梶満里子は、はじめて新島にわたる船の中で「反対派オルグ団の赤旗を右翼の一団がもぎとったのだ。怒声、罵声が乱れ飛び、人波が揺れた」(前掲、梶満里子(1964年)、pp.33-34)という様子を書き留めている。

⁶¹ 梶大介「ミサイルの嵐の中の保育園づくり」『まなぶ』(労働大学出版センター、1961年5月)、pp.8-9。

⁶² 広野広『新島・アリの反乱』(現代評論社、1970年)所収の「ミサイル道路工事がはじまった」(pp.49-63)および巻末の「新島闘争略年譜」(pp.345-350)を参照。

⁶³ 前掲、梶大介(1961年)、p.9。

向ができあがっていた⁶⁴。反対闘争において婦人会が主力となっているのはそのためであった。

ここから一粒会は、新島での活動を反対闘争の支援だけでなく、ミサイル試射場をめぐる対立のもとにおかれた子どもたちへと開いたのである。梶満里子によると、新島行きを説得する梶大介は「おとなたちは主義や利益で争っているんだからいいとして、そのあらしの中に放り出されている子どもたちがかわいそうだ」とも語っていた⁶⁵。こうして取り組まれることになった新島での保育所づくりは、反対派の村民から空き家を借りうけていたとはいえ、保育所そのものは反対闘争から一定の距離を保ち、過程が賛成派か反対派に関係なく子どもを迎え入れていた。梶満里子が高島での活動を記録した『愛の砂に花ひらく』のなかで、「家では早くから行かしているけれど、賛成も反対もなく、ほんとにいいところだ」⁶⁶という賛成派の母親の言葉を記している点に当時の保育所のあり方が示されている。すなわち、保育所づくりを単にミサイル試射場をめぐる反対闘争の一環としてのみ位置づけるのは適切でない。

一粒会の保育所づくりでは、梶大介が調布の共同仕切場を拠点に資金を工面しつつ、梶満里子を中心となって現地での活動を進めていた。梶満里子は1961年2月から翌年の夏ごろまで新島に滞在し、保育所の整備から入所の呼びかけ、子どもたちの保育など多くの役割を果たしていた。この活動を経済的に支えていた調布の共同仕切場では、多大な負荷をうけてバタヤが次々に離れていくという問題を生んだが、現地では梶満里子が2名の保母を育成して保育活動を引き継いでいる。さらに、運営は保育所に関わっていた母親らによって結成された「新島保育園母の会」に任せて、梶満里子は新島を離れている。その後、村内の長栄寺が独自に保育園を設置・経営することを公表し、「母の会」の保育所は交渉を経て長栄寺に移転することを決定した⁶⁷。結果として梶満里子がたずさわった新島村の保育所は、1963年6月に長栄寺が設立した保育園へ統合されたのだが、その活動の意義は保育所が存続したかどうかとは別のところにもある。

一粒会が高島における活動の目標を反対闘争だけでなく村内の子どもたちへと広げたことは前述のとおりで、保育所づくりを中心的に担った梶満里子は、ミサイル試射場をめぐる村内の対立が地域の将来に及ぼす影響を以下のように案じていた。

ま二つに割れた対立のシコリは、賛成派が勝っても反対派が、勝っても、いつまでも残るだろう。そのシコリを解きほぐす役目を、この小さな子どもたちが背負わされていると思うと、いじらしくなってくる。

何も知らないままに背負わされたその十字架を少しでも軽くしてやりたい。⁶⁸

引用のとおり、梶満里子がここで具体的な将来像を提示しているわけではない。しかし、保育所づくりが反対闘争や仕事に向かっていく親に代わって子どもを預かることだけを目的にしているのではなく、与えられた状況のなかで生きる子どもと地域の将来を見すえて取り組まれるものだということを、梶満里子の言葉は鮮明に表している。「何も知らないままに背負わされたその十字架を少しでも軽くしてやりたい」という希望は、保育をつうじて地域の状況を変革しようとする意志でもある。新島につくられた保育所が長栄寺のもとに統合される以前、「新島保育園母の会」は安定的な運営を求めて「へき地保育

⁶⁴ 前掲、広野(1970)、pp.49-63。

⁶⁵ 前掲、梶満里子(1964年)、p.39。

⁶⁶ 同上、pp.108-109。

⁶⁷ 同上、pp.238-254。

⁶⁸ 同上、p.188。

所」認可に向けた行政との交渉を進めていた⁶⁹。たとえミサイル試射場設置に対する反対闘争からして保育所づくりが周縁的な取り組みであったとしても、賛成と反対に分断された村内に地域づくりの新たな芽を生んだ意義を一蹴すべきではない。

長栄寺による保育所の設立計画に対して梶満里子らは当初、以下のような意見を抱いていた。

私たちの腹はきまっていた。それは、私たちが新島に保育園をつくろうと決心したときから、すでに決まっていたことであるが、保育園をだれの私物化することなく、島のお母さんたちが中心となって運営に当たる名実ともに島全体のものにすることなのだ。

そうしてこそ、新島に保育園をつくるということの真の意義がある。どんな小さなことでも、自分たちの力でやったのだという喜びと誇りが、ただ離島という宿命に堪えるということだけを強いられて、自身と勇気を見失っていた島人に、その自信と勇気を取り戻させて、新しい島づくりを推進して行くところの原動力となるべき保育園なのである。⁷⁰

「母の会」は、このように述べていた梶満里子や梶大介から自立して長栄寺への保育所移転を選択したのだが、梶満里子は「母の会」による運営を見つめて「もうこれなら、お母さんたちにまかしてだいじょうぶという確信が持てた」といい、長栄寺に開かれた村立保育園に80名以上の児童が登園しているという保母からの報告をうけ、「私たちのまいた種は小さかったが、りっぱな花を咲かせてくれました」とも述べている⁷¹。このように、新島で一粒会が取り組んだ活動の意義は地域づくりに関与する実践として保育をおこなった点にあり、梶満里子も、そうして子どもたちを主体として地域をつくる可能性を保育という実践のなかに見出していったのではないだろうか。

「新島保育園母の会」と2人の保母に保育所の運営を任せた梶満里子は、1962年夏に新島を離れている。そして新島での活動を記録した『愛の砂に花ひらく』に1964年6月10日付で添えられた「あとがき」は次の文章によって締めくくられている。この梶満里子の言葉を受け、ここまで述べてきた様々な経緯や実践の積み重ねを経て実践された、山谷における保育活動の検討へと進んでいくことにしたい。

最後に、私たちはいま、山谷のドヤ街のどまん中に立って、そこに住む人びととその子どもたちの幸福を願い、相変わらず無力の悲哀をかちながら、元気に働かせてもらっています。

山谷は、私たちのホームグラウンドです。そのドヤ街の厳しい現実の中でも、子どもたちの無邪気さは決してそこなわれてはいません。

そして、その子らの明るい歌声が必ず山谷に新しいあすを呼びよせることを信じています。そこに私たちの小さな歴史がくりひろげられて行くのです。きょうもあすも……。 ⁷²

4. 山谷ドヤ街における保育

あさひ食堂事件とさんや同人

1962年11月23日、のちに「あさひ食堂事件」と呼ばれる日雇労働者らの暴動が山谷で起きた。およ

⁶⁹ 同上、p.247。

⁷⁰ 同上、pp.234-235。

⁷¹ 同上、pp.251-254。

⁷² 同上、p.254。

そ 2000 人による暴動の鎮圧には最終的に約 1600 名の機動隊が出動したとされ⁷³、『朝日新聞』は暴動の発端を次のように報じている。

「あさひ食堂」＝帰山仁之助社長＝で酔っていたとび職若林豊(二一)がまわらないシタで女店員に何かを注文した。よく聞きとれないので、女店員が聞き返したところ若林が茶ワンの茶をぶっかけほかの店員と若林が店の前で口論、そしてケンカとなった。

店員と若林は、間もなく道ひとつへだてたマンモス交番につれて行かれたが、ケンカを見ていた通行人が仲間を集めて同食堂の前に集まり「仲間をなぐったやつにあやませろ」と口々にののしりながら店内に侵入、乱暴がはじまったという。⁷⁴

事の発端は、山谷を縦断する大通り(吉野通り)に面した飲食店「あさひ食堂」で起きた、店員と客との喧嘩であった。しかし、事態は喧嘩の当事者が食堂正面の交番へと連行された後に急変している。喧嘩の様子を周囲で見ていた群衆は店員の謝罪を要求し、ここからはじまった食堂への攻撃が暴動へと発展したとされている。山谷で起きた暴動の多くは地域内の交番を攻撃の対象としていたが、1962 年 11 月 23 日のものは攻撃された食堂名から「あさひ食堂事件」と呼ばれている。この食堂を経営していた帰山仁之助は『朝日新聞』の取材に応じて次のように述べている。

私自身保護司をしており、浅草簡易旅館組合長〔現・城北旅館組合：引用者〕も兼ね、山谷の人びとの気持ちはよく分かっているつもりだ。うらみを受ける覚えもないし、どうしてこんなことになったか分からない。もののはずみだろうが、親や兄弟のいうことさえ聞けないすさんだ孤独な人びとの集まりなのだから、こういった集団暴力が起きない方が不思議なのかもしれない。⁷⁵

15

これにしたがえば、喧嘩の当事者が食堂店員であったとはいえ、食堂が破壊される理由の心当たりは帰山のうちにない。にもかかわらず実際に起きた暴動の原因として与えられた説明が、引用の後半部分である。暴動が起きた理由を自身から完全に切り離し、ドヤ街で生活している日雇労働者らの人格に還元しようとする、この帰山の言明に反応したのが梶大介であった。『朝日新聞』の投書欄に「山谷騒動への反省」という意見を寄せた梶大介は、これを「食堂主人が、山谷旅館組合長として、実際に住民のお陰で生活していながら、逆に世話をしてやっているのだというごうまんな考え」⁷⁶と批判している。ここで指摘されているように、帰山仁之助は「あさひ食堂」経営者だけでなく、山谷におけるドヤ経営者から構成された同業組合「城北旅館組合」で組合長を務めてもいた。ドヤ街で生活している日雇労働者と、そのデズラ(日当)からドヤ代や食費といった形で収入を得ているドヤや食堂の経営者との間にある緊張関係は帰山の想像を超えていたのだろう。

暴動を生起させる日雇労働者らの論理を「自己防衛の連帯感」と表現した梶大介は、これを「決してヤジ馬根性ではない。宗教も、政治も、自分たちを救ってくれないという不信感から生まれる手段なのである」と支持し⁷⁷、暴動に関連して逮捕・起訴された日雇労働者の裁判支援活動にも参加している。

⁷³ 今川勲『現代棄民考 「山谷」はいかにして形成されたか』(田畑書店、1983 年)、pp.206-207。

⁷⁴ 「山谷で住民騒ぐ 食堂に投石、乱暴 山谷騒動」『朝日新聞』(1962 年 11 月 24 日、東京、朝刊)。

⁷⁵ 同上。

⁷⁶ 梶大介「山谷騒動への反省」『朝日新聞』(1962 年 11 月 28 日、東京、朝刊)。

⁷⁷ 同上。

「あさひ食堂事件」をめぐって22名が起訴され、有罪判決をうけた21名のうち3名が控訴し、残りの1名は私選弁護士をつけたことで分離裁判を受けていた。これらの裁判を支援するために日本共産党が中心になって「山谷裁判対策協議会」(山対協)を組織しており、ここに梶大介が参加していたのである。

山谷での活動を開始した梶大介は、ドヤ街の住人による山対協への参加が「全日本自由労働組合台東支部」と「台東生活と健康を守る会」という、それぞれ失業対策事業に登録している日雇労働者と生活保護受給者から構成された組織によって占められているのをみて、新しく「さんや同人」というグループを1964年4月に結成している。ここで目指されていたのは、「山谷の主力となる〈立ちんぼ労働者〉」、すなわち路上の寄せ場で手配師から日々の仕事を得ている日雇労働者を主体にした運動体をつくることであった⁷⁸。「反乱時には見事なほど連帯を遂げるのに、平常時にはそっぽを向いてしまう」⁷⁹という山谷の日雇労働者を中心にした社会運動の構築を試みたのが「さんや同人」であり、機関誌「月刊さんや」は創刊号で「おれたちはもっと自信を持っていい／おれたちのエネルギーをもっと爆発させろ！／“さんや”はそのための雑記帖だ／なんでもかんでもぶちまけろ！」⁸⁰と呼びかけているように、そのためのプラットフォームとなっていた。そしてもちろん、「さんや同人」には梶大介と共に調布から山谷へと移住していた梶満里子も参加しており、この場所で行われていたのがドヤで暮らしている子どもの保育活動であった。

山谷における児童対策：家族世帯の「脱出」

当時、山谷のドヤ街では子どもを連れた家族が少なからず生活しており、この地域に暮らしている子どもを支援しようとする団体も多かった。たとえば、「長欠児童生徒援護会」(黄十字会)は教育紙芝居運動に取り組んでいた松永健哉を中心に結成され、国会議員の池田勇人、大平正芳が会長と副会長を務める全国組織であり、山谷では長欠児童への学習指導を行なうほか、未就学児童の戸籍作成や住民登録を補助するなど就学支援に取り組んでいた。ほかに、帰山仁之助らが代表をつとめていた「小さいバラ子供会」は週末の旅行といった校外学習を実施しており、黄十字会で活動していた益田政良が独立して学生ボランティアとともに開いた「山谷地区学習会」もあった⁸¹。

また、「山谷対策」を進めていた東京都は、未就学・長欠児童の学習支援施設として1964年4月に「ひなぎく教室」を設置し、これは翌年11月に「城北学園」と改称されている。しかしながら「城北学園」は学校としての認定を受けておらず、同校の生徒が受け取った卒業証書には「台東区立蓬莱中学校」と記載されていた。1970年9月に「城北学園」が「台東区立台英小・中学校」へと改組されたことでその問題は解決されるが、本稿「はじめに」のなかで触れたとおり、山谷における子どもの数は1960年代から減少を続けていった。「台東区立台英小・中学校」も1976年3月に卒業生を送り出したのち閉鎖されている⁸²。

そのように子どもの数を減少させた大きな要因として、山谷の簡易宿所に宿泊している家族世帯へ優先的に都営住宅が割り当てられたことが挙げられる。これは「山谷対策」の一環として実施されたもの

⁷⁸ 梶大介『山谷戦後史を生きて』上巻(續文堂、1977年)、pp.70-79。

⁷⁹ 同上、p.73。

⁸⁰ 同上、p.96。

⁸¹ 前掲、今川勲(1983年)、pp.228-231。小林正泰「簡易宿泊所地域における長欠対策学級の実践 東京・山谷地区の事例を中心に」『青少年教育フォーラム 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』6号(国立オリンピック記念青少年総合センター、2006年3月)。山谷問題研究会『最下層の系譜』上巻(1976年2月)。

⁸² 杉本譲治「山谷にともされた教育の灯」東京都立教育研究所編『教育じほう』428号(東京都新教育研究会、1983年9月)、pp.80-82。

だが、その意図は山谷から家族世帯を「脱出」させることにあったとされている⁸³。実際、山谷の子どもに向けられた関心のなかで特に注目を集めていた未就学・不就学児童の問題については、就学に向けた支援を東京都やボランティア団体が繰り返しても、「可能性の存する限り、問題の根本的解決とはならない。結局、可能性の解消を目途としなければならない」⁸⁴とされていた。ここで問題とされていたのは山谷に生活する子どもが学校に通えていないということより、むしろ山谷に子どもが住んでいるという現実そのものであった。そうした文脈のなかで家族世帯による山谷からの「脱出」が必要と見られていたのであり、「山谷対策」が実行されたのである。

しかし、西澤晃彦が触れているように、この政策はそれほどスムーズに遂行されたわけではない。山谷における梶満里子の保育活動が「山谷対策」に抵抗したわけではないが、これと時期を同じくして取り組まれていたドヤっ子の保育は、「脱出」をめぐるって実際に生じていた矛盾や葛藤の一端を示している。家族世帯を山谷から「脱出」させることは、子どもや家族をめぐるって生じていた問題を無かったことにしても、それを解いたことにはできない。次にみる梶満里子の保育活動は、山谷においてドヤっ子とその家族の生活を支えつつ、まさにそのような問題を解こうと試みる実践であったと見ることができるのではないだろうか。

梶満里子の青空保育

梶大介と梶満里子は、山谷の玉姫公園に近いアパートで2つの3畳間を借りていた⁸⁵。アパートには世帯道具のほかにオルガンをはじめとする保育道具を運びこんで自宅兼保育室にし、天気がいい日には玉姫公園を活用して青空保育をおこなっていた。その保育活動における日々の様子を記録した『粒ちゃんになりたい』では、ドヤで生活している子どもや家族の状況を垣間見ることができる。そのすべてをここで取りあげることはできないが、なかでも多くの字数を割いて記録されているヨシ君(5歳)一家について見てみよう⁸⁶。

ヨシ君は3人兄弟だが、弟のモリちゃんが急性肺炎で入院し、母親が看病につきっきり、末っ子はまだ赤ん坊で「ドヤのおばさん」に1日200円で子守をしてもらっている。医療保護で入院費用を支払っていても、生活費を得るために父親は働き詰めになっている。そこに残されているのがヨシ君で、ある日は午前7時から梶満里子のもとへやってきて、昼食と夕食の時もアパートで過ごしている。仕事を終えた父親が家族のいる病院へ連れていこうと迎えに来ても、ヨシ君が出かけることを嫌がることもある。ヨシ君をめぐるこうした状況を見つめていた梶満里子は、以下のように、夜間も子どもを受け入れ可能な保育体制を構想している。

保育所の有用論、そして不足の声があちこちからあがっているが、放置された子どもたちが日本のいたるところにいっぱいいる。山谷のような生活条件の悪い地域には、夜間保育所がどうしても必要になってくる。期待される人間像も結構であるが、そうした人間になれるような環境づくりを怠っていて、そうなりなさいとは、大臣がたも、虫がよすぎるといふものである。なにかつごうの悪いときにいつでも泊めてあげる保育所—二十四時間の保育—たいへんだろうがその必要性をしみ

⁸³ 前掲、浜野(1980年)、pp.78-84。

⁸⁴ 東京都山谷福祉センター『山谷地域の簡易宿泊所に宿泊する就学児童の実態とその対策』1963年3月、p.39。

⁸⁵ 前掲、梶満里子(1966年)、p.18。

⁸⁶ 同上、pp.203-208。

じみ感じ、小さくてもよいから自分たちでつくりたいと、切実な願いが胸の中にきしむ。⁸⁷

ヨシ君一家の末っ子は「ドヤのおばさん」に200円で子守をしてもらっているが、ヨシ君は家族から離れて朝早くから夜遅くまで過ごさざるを得ない。そこで必要とされるのが夜間保育所、あるいは24時間いつでも子どもを受け入れることのできる保育体制である。むしろ、そのように子どもを受け入れる場が無いのであれば、ヨシ君一家の生活が山谷以外の地域に移ったところで改善される保証もない。しかも、梶満里子の保育だけでなく、有料ではあるが宿泊しているドヤが幼児の世話を受け入れていることにも注意しなければならない。理想的には1日から数週間の短期的な宿泊施設として想定されているドヤだが、ドヤと宿泊者との具体的な関係のなかに家族生活の存立を可能にする条件が含まれている場合も実際にはあるのだ。

梶満里子は、都営住宅への入居に当選した家族の足跡も『粒ちゃんになりたい』のなかに記している。ドヤに宿泊していた家族世帯が転居するにあたって、その費用が社会福祉協議会から世帯厚生資金として貸与されることになっていたのだが、申請の手続きに梶満里子が付き添い、場合によっては梶大介が保証人を引き受けるといった支援をおこなっていた⁸⁸。そうしたなかで関係を持っていた家族のなかには、都営住宅からふたたび山谷のドヤ街にもどってくる家族もあった。

「おばさん、オレ知ってるかい」

澄んだ瞳のその男の子は、にっこりとしてわたしの顔をうかがった。

「よく知っているわよ。ススム君でしょう」

「そうだ、あたったよ」

「ススム君は、たしか西新井の住宅に引越したのでしょうか。きょうはあそびにきたの」

「前にいた旅館にかえってきたんだよ。父ちゃんが帳場をやっているんだ」

ススム君たち一家は昨年都営住宅に当選して、他の百九十三世帯の人たちと山谷から転出したのだったが、多分仕事のつごうで山谷へ逆もどりしたのであろう。アッコちゃんたち一家もこのとき転居したけれど、山谷以外では、お母さんがいくら働いても三人の子どもを育てることはできず、けっきょく、山谷へ舞いもどって、元の仕事のおでん屋台で働いているということも聞いている。⁸⁹

山谷における梶満里子の保育活動は、このような実情をふまえることで、その意味をつかむことができる。先述のとおり東京都は家族世帯を山谷から「脱出」させることによって、未就学や長欠といった児童問題が発生する可能性を取り除こうとしていた。ところが、都営住宅に当選した家族が山谷のドヤにもどってくることもあったように、都営住宅への入居を推進するという施策で問題が解決されていたとは言いがたい。梶満里子の保育活動は、都営住宅への入居を希望する家族世帯を支援しつつ、その一方、山谷で生活することを必要にしている子どもやその家族のために何ができるか、そして保育を通じて地域のありようをどう変えていけるのかという課題を含んでいた。『愛の砂に花ひらく』に梶満里子が記した、山谷の「子らの明るい歌声が必ず山谷に新しいあすを呼びよせる」という信念は、新島での経験をふまえてそのような変革が可能であるという希望でもあったろう。

また、『粒ちゃんになりたい』という著作のタイトルは、山谷の外からやってきた梶満里子と梶大介と

⁸⁷ 同上、pp.207-208。

⁸⁸ 同上、pp.126-133。

⁸⁹ 同上、pp.208-209。

の間の一人娘・粒ちゃんを見たドヤッ子のルリちゃんが発した言葉である。おなじく「あとがき」のなかで、梶満里子がこの言葉を反芻している。

ルリちゃんがもう「粒ちゃんになりたい」などといわずに、「ルリ子はやっぱりルリ子でよかった」と、ルリちゃんが胸を張って高らかにいえる日がくるまでは、愚痴り、泣きわめきんがらも、スラムの中に耐えて生きて行くことでしょう。それ以外にわたしの生きる道はありません。⁹⁰

これは梶満里子の決意でもあったが、「山谷裁判対策協議会」にも参加していた同時代の評論家・神崎清によると、「子どもを通して、地域の母親の組織化をねらっていた」保育活動は「多少のシンパができて、個人の負担には、あまりにも荷が重すぎて、永続しなかった」⁹¹という。しかし、「山谷対策」によって家族世帯の地域外への転出が進むなか、あえて子どもと家族に密着した保育にこだわっていた梶満里子の実践をここで切り捨てるべきではない。新島での保育所づくりがそうであったように、山谷のドヤ街における保育活動も、地域のありかたに向き合うことと密接不可分のものであった。梶満里子が取り組んでいたのは、この意味で、まさに地域をつくる実践としての保育であったといえよう。それゆえ、これをドヤッ子が完全に過去の問題とされた寄せ場をめぐる歴史の奥底に埋め込んだままにしておくわけにいかないのである。

おわりに

本稿では、梶満里子が梶大介と「自然保育」に取り組み、伊豆諸島・新島での保育所づくりを経て山谷での青空保育にいたるまでの道のりをたどってきた。この作業のなかで浮かびあがってきたのは、梶満里子が社会変革の手段として保育に取り組んでいたのではなく—この点で、バタヤと一般社会との交流という目的の中に子どもを位置づけた梶大介とは異なる—、子どもやその家族に向きあうことで地域のあり方を見つめ、臆気ながらもそこに変革の可能性を感じとっていたことである。このように地域をつくる実践として見いだされた保育のあり方を、ほかの場所で行われた保育活動と照らし合わせてみることもできる。1970年代の横浜・寿町には「寿共同保育」という運動があった⁹²。山谷では梶満里子が中心となって保育活動を担っていたのに対し、この運動はドヤ街の住人による「共同保育」として行われていた。この「共同保育」が持つ意味を、参加者のひとは以下のように述べている。

私達の運動は、一面では、地域づくりであった。子ども達は地域で育つ、とたてた時、地域はまさに内容的に地域でなければならなかったし、崩壊を阻止し、作りだすことであった。従って、「共同保育」の対象は子供に限らず、私自身も含めた大人であり、老人であり病者であり、「障害」者であり、要するに全ての人々が地域の中で共に生きていくことであった。⁹³

寿町における「共同保育」こそ、地域をつくる実践そのものであった。それは単に地域の子どもをあずかるのではなく、子どもたちが生活し育っていく場としての地域を「作りだす」ためのものであった。それゆえ「共同保育」では子どもが運動の対象とされるだけでなく、「全ての人々が地域の中で共に生き

⁹⁰ 同上、p.216。

⁹¹ 神崎清『山谷ドヤ街 一万人の東京無宿』（時事通信社、1973年）、p.248。

⁹² 寿共同保育『寿共同保育 寿ドヤ街での9年間』（1982年）。

⁹³ 同上、p.30。

ていくこと」が目標となる。「内容的に地域でならなかった」とされているように、地域とはただ地図上で指し示すことのできるものでなく、すべての人々が互いに結び結ぶ具体的な関係性を含んだものとして捉えられている。

ここからさらに展開して被差別部落における保育の実践を参照してみてもいいだろう。具体的な例として、東京・足立区の保育室「なかま」がある⁹⁴。「なかま」は部落解放同盟足立支部員が集団入居した団地のなかで1974年に創設されており、家内工業者が多い足立支部の親同士で布団やおもちゃを持ち寄ったことがきっかけになっている。支部員の子どもは次第に減少していったが、「地域や学校でのことなど、日本社会で抱えるさまざまな悩みごとを話し合える場所」としての保育室に在日朝鮮人の住民が加わることもあり、「こうした『なかま』とのつながりが、部落の親たちと、在日朝鮮人の親たち同士のつきあい」⁹⁵を生んでいた。「なかま」はさらに、足立区行政が1982年に下した同和対策事業(啓発活動を除く)と同和対策集会所の廃止に対する地域共闘のなかで、地域内外に広がる反差別のネットワークをとり結ぶハブとして機能してもいた。

以上のように、保育とは決して子どもを預かるだけのものではない。実践のありようによって、子どもたちだけでなくその家族、そして地域の人々との間で多様な結びつきを生みながら地域づくりを展開させていく可能性が保育にはある。保育は子どもを預けたい大人たちのためにあるのではない。梶満里子の言葉を借りるならば、子どもが「新しいあすを呼びよせる」のである。そのような視点にたって保育運動の歴史をさらに紐解いていくことが、これからの実践を考えていくためにも必要なのではないだろうか。

小美濃 彰(おみの あきら、Akira OMINO)

東京外国語大学大学院 博士後期課程

参考文献

(単行本)

秋山健二郎・森秀人・山下竹史編『現代日本の底辺 第1巻「最下層の人びと」』三一書房、1960年

石村紀子「保育日誌の利用」日本幼稚園協会『幼児の教育』第59巻11号、1969年

今川勲『現代棄民考 「山谷」はいかにして形成されたか』田畑書店、1983年

梶大介『バタヤ物語 俺達だって人間だ』第二書房、1957年

——『粒ちゃんの灯 妻と子と大八車の記』光文社、1959年

——『山谷戦後史を生きて』上巻、績文堂、1977年

——『生ききらなければ真実は見えてこない わがどん底歎異抄』樹心社、1986年

梶満里子「白衣の天使」、草の実会第七グループ編『戦争と私 主婦たちの第二次世界大戦記』草の実会第七グループ、1963年、pp.103-104

——『愛の砂に花ひらく』第二書房、1964年

——『粒ちゃんになりたい 山谷の子らと生きる日々』あすなろ書房、1966年

神崎清『山谷ドヤ街 一万人の東京無宿』時事通信社、1973年

寿共同保育『寿共同保育 寿ドヤ街での9年間』、1982年

⁹⁴ 友常勉「反差別のネットワークを 東京・足立区の保育室「なかま」とバザー」『部落解放』397号(解放出版社、1995年11月)、pp.62-79。

⁹⁵ 同上、p.78。

- 小林正泰「簡易宿泊所地域における長欠対策学級の実践 東京・山谷地区の事例を中心に」『青少年教育フォーラム 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』6号、2006年3月、pp.33-44
- 山谷労働者福祉会館活動委員会・2016-17 山谷越年越冬闘争実行委員会・山谷争議団／反失業闘争実行委員会・はじめての山谷講座編集委員会編『はじめての山谷講座』2017年
- 塩沢正一郎・鶴見欣次郎「東京私設聯盟より」平野義一編『私設社会事業 丸山鶴吉先生古稀記念集』東亜援護協会、1953年、pp.248-250
- 塩沢美代子・島田とみ子『ひとり暮らしの戦後史 戦中世代の婦人たち』岩波書店、1975年
- 新海均『カップ・ブックスの時代』河出書房新社、2013年
- 鈴木富之「東京山谷地域における宿泊施設の変容 外国人旅行者およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に」『地学雑誌』120巻3号、2011年6月、pp.466-485
- 竹内基浩『「六〇年安保」を労働者はいかに闘ったか』社会評論社、2010年
- 調布市史編集委員会編『調布市史 下巻』、1997年
- 東京都山谷福祉センター『山谷地域の簡易宿泊所に宿泊する就学児童の実態とその対策』、1963年
- 東京都資源回収事業協同組合『東資協二十年史』、1970年
- 東京都城北福祉センター『山谷地域と城北福祉センター』、1972年
- 鳥羽耕史『1950年代 「記録」の時代』河出書房新社、2010年
- 友常勉「反差別のネットワークを 東京・足立区の保育室「なかま」とバザー」『部落解放』397号、解放出版社、1995年11月、pp.62-79
- 西澤晃彦『隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー』彩流社、1995年
- 西澤晃彦編『労働再審4 周縁労働力の移動と編成』大月書店、2011年
- 日本図書センター『社会福祉人名資料事典』、2003年
- 野中乾・星野朗『バタヤ社会の研究』蒼海出版、1973年
- 浜野一郎「山谷児童対策の歴史(1)」『明治学院論叢』285・286号、1980年2月、pp.77-129
- 広野広『新島・アリの反乱』現代評論社、1970年
- 松崎芳伸「児童政策の進路」、厚生省児童局監修『児童福祉』東洋書館、1948年、pp.5-50
- 松本なるみ「戦後における「保育者」という職業選択 元保育者の語りから」、『宇都宮短期大学人間福祉大学研究紀要』7号、2009年、pp.9-20

(雑誌記事)

- 「ニコヨン文芸 労働省編『日雇いの歌』、『週刊朝日』朝日新聞出版、1956年5月20日、p.67
- 梶大介「ミサイルの嵐の中の保育園づくり」、『まなぶ』労働大学出版センター、1961年5月、pp.8-9
- 「私はバタ屋です」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956年6月10日)、pp.84-85
- 梶満里子「新島と山谷の生活から」、『月刊社会教育編集委員会』編『月刊社会教育』78号、1964年5月、pp.40-44
- 熊本浩二「『ニコヨン文芸』評に答う」『週刊朝日』朝日新聞出版、1956年5月27日、p.136
- 杉本譲治「山谷にともされた教育の灯」東京都立教育研究所編『教育じほう』428号、東京都新教育研究会、1983年9月、pp.80-82
- 永井萌二「どん底三千キロ バタ屋旅日記」、『週刊朝日』朝日新聞出版、1958年12月28日、pp.84-87

(新聞記事)

- 「『全日本私設社会事業連盟』大阪で創立準備委員会」『大阪毎日新聞』、1931年4月17日
- 「バタ屋も仲間入り 京で日本初の組合結成」『都新聞』、1954年11月4日
- 「新妻も大八車で紙芝居」『毎日新聞』、東京朝刊、1956年8月14日
- 「目ざす『バタヤ組合』 梶さん夫婦が“どん底救済運動”」『毎日新聞』、東京朝刊、1956年10月22日
- 「バタヤさん労組結成」『朝日新聞』、東京朝刊、1956年11月11日
- 「バタヤさんの労組」『読売新聞』、東京朝刊、1956年11月11日
- 「夢は貧しい子らに 『バタヤ物語』2局から放送」『毎日新聞』、東京朝刊、1957年5月13日
- 「われわれも人間だ...」『朝日新聞』、東京朝刊、1957年5月23日
- 「『一粒の麦』どこへ」『毎日新聞』、東京朝刊、1959年5月12日
- 「山谷で住民騒ぐ 食堂に投石、乱暴 山谷騒動」『朝日新聞』、東京朝刊、1962年11月24日
- 「山谷騒動への反省」、梶大介、『朝日新聞』、東京朝刊、1962年11月28日
- 「青空保育拝見 保母さんが毎週巡回」『朝日新聞』、東京朝刊、1966年7月17日

(インターネット)

- 長谷川高「『山谷地区』の意外な現在...労働者の街はどう生まれ変わったのか？」
(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/70119> 最終閲覧日：2020年2月13日)